

特集

宗教と倫理

編集意図

倫理を善悪の判断というモラルの位相で捉えるのであれ、あるいは共同体の統合を支えるエートスという位相で捉えるのであれ、古来宗教は倫理と切っても切れない関係を結んできた。倫理的生が普段はある程度の自立性をもつて営まれていたとしても、いったんその根拠が問われざるをえないような状況が出来すると、人々は宗教的次元の言説や行為に助けを求めてきた。しかし他方で、そのような関係性のゆえに、宗教が既成の倫理に対して否を突きつけ、ある種の脅威として迫ってくるということも起こりえた。宗教と倫理のこうした関係は、それぞれの宗教の特質や時代・社会の状況に応じて、さまざまな形を取って現われてきた。

西洋近代の体制がとどまることのない拡張を見せてきた近現代の世界において、この点に関してきわめて大きな変化が生じたのは事実である。個人においても社会においても、倫理的生をそれ自身から説明し意味づけようとする努力が推進され、その結果、宗教的なものは、多くの場合倫理的生の周縁部へと追いやられてきた。しかし、私たちが生きる時代において明らかになってきたのは、まさに西洋近代のこうした拡張を突き動かした科学技術の飛躍的な進展によって、倫理を内在的に基礎づけようとする努力がさまざまな局面で挫折を余儀なくされているというところである。倫理において基礎的な了解事項とされてきたことが、生命倫理や環境倫理といった「応用」倫理の

編集委員会

分野において、これまで想像もしなかった仕方でも根底から問い直されていることは、その証左であると言える。

このような状況において、宗教と倫理の関係という大きな問題をめぐって、宗教研究者がそれぞれの持ち場からあらためて考察し、その成果をたがいに突き合わせてみることは、きわめて意義深い作業であると思われる。ただしこの考察は、上に述べたような経緯からして、宗教と倫理の双方が根本的な不安定性を内に抱え込まざるをえないという現代的な状況を踏まえてなされねばならない。その場合、宗教とは何か、倫理とは何かといった問いを無反省に大上段から立てることはもはやできないであろうし、また、各宗教がこの問題をどう考えてきたかをただ紹介するだけでは不十分であろう。むしろ、現代の倫理的生が直面せざるをえない個々の困難こそが出发点となるべきであり、それらをいわばセンサーとして、新たな考察が紡ぎ出されるべきである。悪や苦の新たな諸形態、暴力や紛争、科学技術がもたらした未曾有のリスク、グローバル化した世界における個人的・共同的アイデンティティの不安定化等、そうした困難は多種多様な局面で見出されるであろう。

こうした倫理的困難に立ち向かう際に宗教的なリソースがどのような仕方でも持ち出されているかを検討し、そこから現代において宗教と倫理の関係を構想し直すためのさまざまな切り口を掴み出してくること、それが本特集号で意図することである。そのためには、諸宗教ないしは宗教的運動がそうした困難に面して行う実践を題材にすることもできるし、また、そうした問題に照らして、過去の宗教的伝統から有益な洞察を引き出してくることもできる。あるいは、現代の宗教哲学・宗教思想がそうした場面で見せている新たな理論的考察を手掛かりにすることもできよう。さまざまな種類のアプローチを取り集めることによって、宗教と倫理という古い問題のアクチュアルな姿を提示したい。